
ひぐらしのなく頃に 転生編

げんげん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 転生編

【Nコード】

N4636Y

【作者名】

げんげん

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃に。にオリキャラを登場させたものです。

雛見沢にやってきた蓮間 幸作と鈴香。

はたして幸作は度重なる惨劇を回避することができるのか！

部活メンバーの年齢がよくわからないので、

魅音 中3。 レナ 圭一 中2

沙都子 梨花 小6

という設定になっています。

プロローグ(前書き)

どうも、げんげんです

感想、質問など、気軽に送ってください。

プロローグ

「……のです。起きるのです！」

どこからか声がする。耳障りだ。俺は眠たいんだよ。寝かせる。

「あう。起きるのですー！！」

「だあ！ うっせーな。耳元で騒ぐな！」

突然の大声に飛び起きる。周りは真っ暗。まだ夜か。

「やっと起きたんですね。なら話しがあるのです」

声のする方を見る。そこには巫女服の女が立っていた。なんだこれ。俺の妄想が具現化したのか？ ていうか角あるんだけど。こいつ。

「梨花に……みんなに力を貸してください！」

「はあ？ なに言ってるんだよ。つか誰だよ梨花って」

「行けばわかります」

行けばって。俺は学校が……。って、あれ？ 学校なんて行ってたっけ。というかそもそも俺は誰だ？ やばいぞ。プチ記憶喪失か？

「お前、一体なにをした」

「あなたはすでに元の世界から消えた人間。ただの霊体です」

霊体……。ってことは俺、死んだのか？ そういえば俺、下校中に車道に飛び出した子供をかばってひかれたんだっけ。

「あなたには生前、梨花の助けになれる力があつた。それは恐らく、今のあなたにもあるはず」

力なんてある気がしないけどな。手から光線がでるわけでも、相手の思考が分かるわけでもないし。だいたい本当に力があるなら死にやしないだろ。

「その力で……梨花を。みんなを助けて欲しいのです」
「助けるって。なにするんだよ」

「それは時がくればおのずと分かるでしょう」

めっちゃくちゃアバウトだな。こいつ。

「そこから落ちれば、向こうの世界に行けます」

「落ちるのか!? ここから!？」

穴を覗いて見る。底が全然見えない。これ、落ちたら無事で済むのか？

「なにをしているのですか？」

「い、いや。別に」

「じゃあ、早くして欲しいのです」

「ああ」

でもなあ。落ちる勇気がなあ。

「ならば手伝ってあげるのですっ」

「お、おい。やめろって。押すな！」

背中を押される。こいつ、俺を殺す気か？

「あっ、そうだ！ 質問。一つ質問させてくれよ」

「あう？ なんですか？」

とたんに背中にかかっていた力がなくなる。ふう。一安心。

「俺だけで本当にできるのか？ その手助けってやつ」

「それなら平気です。もう一人声をかけてあります」

「あっ、そう」

「というこで．．．．．えい」

「えっ？ うわああああ」

とんつと背中を押される。そのまま俺は穴へ真つ逆さまに落ちて行く。死なないよな。俺。

「蓮間 幸作。人守る心優しいものよ。きつとあなたはこの場所のことを忘れてしまってください。でも力のない私の代わりに梨花を救ってください。あの袋小路から．．．．．」

落ちて行く中、後ろからそんな声をが聞こえた気がした。

プロローグ（後書き）

次回から本編キャラクターが出てきます

転入初日(前書き)

どうも、げんげんです

転入初日

「……………うわぁ！落ちる！！……………ってあれ？」

目を覚ますと普通の天井。どうやらあれは夢だったらしい。にしても変な夢だよな。巫女服の女に誰かを助けるって言われるなんて……………あれ？誰を助けるって言われたんだっけ。

「お兄ちゃん？ どうしたの大声出して」

「なんでもねえよ」

頭をかきながら布団から這い出る。

「鈴香。今日からだっけ。学校」

「そっだよ。お兄ちゃんいつまでも寝てるんだもん。置いて行くのかと思っちゃった」

鈴香はもうカバンを持って着替えを済ませている。こいつは本当に兄貴を置いて行くつもりだったのか？

「飯は？」

「そこにトーストがあるでしょ。食べてる時間ないんだから、先に着替えてきてよね」

「はいはい」

重たい体を無理矢理動かし、自分の部屋に向かう。特別大きなアパートじゃないけど、部屋はちゃんとそれぞれあるし、そこそこ広い。やっぱり田舎は土地が余ってるのかね。まあ二人だからそう感じるのかもしれないが。

「お兄ちゃん、まだ？」
「今行くよ」

新品の制服に袖を通す。そういえばこの制服、この村の権力者が選んでるんだっけ。誰かは知らないけど、結構変わった制服を選ぶよな。俺の制服普通だけど、鈴香のなんか都会でも見たことないぞ。

「準備できたみたいだね。ほら、早く行こっ」
「はいはい」

玄関に鍵をかける。この家の周りには他の家はねえし、鍵をかける必要はないと思う。まあ用心にこしたこたあないか。

「学校かあ。友達できるかな？」
「さあな。できるんじゃないの」

俺たちがこれから通う学校は、学年がバラバラの分校だ。村に一つしかないから場所は昨日の一日で覚えられた。

「蓮間 幸作さんと鈴香さんですね」
「はい」
「教室はこっちです」

先生に連れられて教室へ向かう。なんか学校らしくないよな。

「では私は準備があるので、先に入っていてください」
「はい」

先生が職員室へ歩いていく。さつてと。俺は教室に……つてあれ？ 向こう側になんか見える。なんだ？

「どうしたの？ お兄ちゃん。あたし先に入っちゃうよ」
「あつ、やめたほうがー」

忠告も聞かずに鈴香が教室の扉を開ける。

「きゃああああ」

「ちよつと圭一さん。男の方ではないではありませんの！」

「ま、まさか女の子とは……。君！ これ以上進んだら……。ぐわああああ！」

なんだか入りぬくい雰囲気になってるぞ。叫び声が尋常じゃないんだが……。

「お、おい。大丈夫か？」

とりあえず足元に転がってる男に声をかける。息はしてるし、たいしたことはなさそうだな。

「ぐつ……。さ、沙都子お！ お前少しは加減をしるよ！」

「お、おっほっほっほ。十分加減はしたつもりですよ」

うーん。とりあえず鈴香を起こしにいくかな。

「おい、鈴香。平気か？」

「うん。うわあ。頭に粉があ」

鈴香の頭が真っ白だ。たぶん原因は扉の近くに落ちてる黒板消しだろつ。

「たくつ、止めたのに聞かねえからだぞ」

「うん……」

鈴香の頭の粉をパタパタとはたく。何回かはたくと粉は綺麗になくなつた。

「大丈夫？ 沙都子ちゃんも悪気はないから許してあげてね？」

「服も真っ白なのです。かわいそかわいそなのです」

「ほら沙都子に圭ちゃん。ちゃんと謝って」

後ろの席から何人ががやつてくる。鈴香の服をパタパタとはたくと、すみのほうで俺たちを見ている二人を見る。

「いやあ。悪いな。ちょっと調子に乗っちゃまって。沙都子、お前も

謝れよ」

「わたくしは悪くありませんわ」

「お前なあ」

「いいじゃないですの。お兄様に助けをいただいているんですから」

「おい、沙都子！」

そう言って女の子はそっぽを向いた。

「ごめんね。沙都子ちゃん、お兄ちゃんがいるあなたが羨ましいんだと思うの」

羨ましいって。こりゃ複雑な事情がありそうだな。俺はそいつの元

に歩いていく。たしか沙都子……とか言ったよな。

「おい。沙都子」

「な、なんですか？ 妹の復讐でもなさるおつもり」

俺が一步近づくとたびに沙都子はゆっくり後ずさりする。まあ怯えるわな。

「ひえっ」

俺が手を上に上げると体を縮めて目を閉じた。たぶん俺が叩くとも思っただろう。俺は上げた手をそのまま沙都子の頭におく。かんで沙都子の頭をなでると、沙都子はゆっくり目をあけた。

「お前になにがあつたかは知らねえけど、

悪いことしたら謝らなきゃだめだろ？」

「でも……」

「お前はもやもやしないのか？ 謝らないままで」

沙都子は一度俺の顔を見ると、鈴香のもとに歩いていった。

「いたずらしてごめんなさいですわ。許してくださいますか？」

「うん！」

なんか仲直りしたみたいだな。

「す、すごいねえ。君。あの沙都子を謝らせるなんて」

「本当。なんでかな？ かな？」

「いや、鈴香も頑固だからな」

沙都子のほうが素直なほうだぜ。

「あらっ、早く席に着きなさい」

そんなことをやっているうちに先生がやってきた。全員急いで席に座る。

「新しいお友達を紹介します。さっ、二人とも」

「はい」

先生に急かされて前に出る。

「蓮間 幸作だ。中二。よろしく」

「蓮間鈴香です。小6。よろしくお願いします」

「みなさん。仲良くしてあげてくださいね」

先生に席に案内される。席は近い年齢同士で固まっているようだ。

「俺、前原 圭一。よろしくな。幸作」

「竜宮 レナだよ。よろしくね。幸作くん」

「園崎 魅音。君のあだ名は幸ちゃんて決まりだね」

「よろしく」

一斉に話されて一瞬驚く。

転校一日目。ドタバタもあったが、なんだか楽しく過ごせそうだ。

転入初日（後書き）

圭一の出番少なっ！

まあこれから活躍すると思います

部活開始！（前書き）

げんげんです

では始まりまーす

部活開始！

「ちよつと待ちなよ蓮間兄妹」

授業も終わり、下校しようと思ったところで魅音に声をかけられる。

「なんだよ」

「今からテストを始めるんだよ。だよ」

「テスト？」

クラスのやつらはみんな帰った。俺たちだけがテストを受けるって
いうのはおかしいよな。てことは違うテストか。

「蓮間 幸作！鈴香！ 今からあんたたちが我が部にふさわしいか
テストを行う」

部って、部活動だよな。魅音が机にトランプを出してることには、
やるのはトランプだろうけど。やるのはトランプゲームだろう。な
らいいか。面倒だし。

「俺パス。なんか面倒だし」

「ほほう。逃げるんだな幸作」

「はあ！？」

なんだ今、いい加減なことを言ったやつは！

俺は逃げる気はさらさらない！

「そつだよなあ。ぼろ負けした姿なんて妹に見せられないもんなあ」

「圭」。てめえなに言ってるやがる」

「魅音、幸作はとんだヘタレ野郎だ。テストするまでもなく入部の資格はない」

圭一が嫌な笑みを俺に向ける。待て。挑発に乗るんじゃない俺！これは圭一が俺にテストをやらせようと仕掛けた罠だ。鈴香は沙都子たちに言いように言いくるめられたみたいだが、俺はそうはいかないぜ。

「どうしたヘタレ野郎。反論もできないかあ？」

なにを言われても動じるな。こいつだって無理だとわかれば諦めるにちがいない。

「ほう。なかなか頑固だな？ わかった。お前、面倒とかいいながら用事があるんじゃないのか？」

「はあ？」

圭一が突然検討外れなことを言ってくる。……いや、待てよ。これは乗っておいたほうが楽じゃないか？

「そ、そうなんだよ。ちよつとな」

「やっぱりな。行ってこいよ」

「ああ。悪いな」

なんだ？ 圭一、救ってくれたのか。でもあいつがふっかけてこなければ俺はすぐ帰れたんだが。

「お兄ちゃん、用事ってなにかな？」

「鈴香ちゃん、男にはいろいろあるんだよ」

「あつ、もしかして幸ちゃん……」

「勘がいい魅音。まさにその通りだ」

「へえ。でも本屋なんて知ってるのかな？興宮あたりまで行かないと本屋はないよ」

「．．．．少し立ち止まって圭一たちの話を聞く。本屋って、俺そんなこと圭一に言ったけな。」

「そつえば鈴香ちゃん。幸ちゃんとは部屋が違うの？」

「うん」

「そうか。じゃあ今日は幸作の部屋に入らないでやったほうがいいぞ」

「？」

「部屋が別とか、部屋に入るなどが。まさかこいつら．．．．」

「圭一さんに魅いちゃん、さっきからなにを言ってるのかな？かな？」

「レナ、聞くな。男にはしょうがないことなんだ」

「圭一いいい！お前なに言ってるんだああ！」

思わず教室へ舞い戻る。これじゃあ明日から生暖かい目で圭一たちに見られること確実じゃないか。

「ん？なにつて今日のお前の予定だよ」

「そんな予定入ってねえよ！」

「無理すんなつてテストはやらなくていいから、行ってこいよ」

圭一の生暖かい目が俺をじっと見ている。

しょうがない。男、蓮間 幸作！ここは腹くくってやらあ！！

「やるよ！やりやいいんだろ！　どんなテストもどんとこいだ！！」

「魅音、だつてよ」

「ほーい。さつすが圭ちゃんだね」

「まあな」

二人のやりとりを見て実感した。俺はこいつらにはめられた・・・
・・・らしい。

「さつ、早くテスト始めるよー。ちなみに今日の罰ゲームはこの服
ね」

魅音の手にはヒラヒラのたくさんついたメイド服を持っていた。

「お、おい。まさかこれを着るとかじゃ・・・」

「当然だよ」

「俺も圭一も男だぞ！？」

女装なら昔友人にさせられたことが数回あるが、これはその限度を
超えてるだろ！！

「幸作、覚悟を決める。今日はいいほうだ」

圭一が遠い目をする。こいつはいつたい今までなにを着せられてき
たんだろう。

「ちなみに色違いのセットだからビリから二番目も着てもらつから
ね！」

つてことは人数は七人だから四人までなら負けてもいいってことか。

なら平気だ。俺はトランプけっこう強いしな！

「ゲームは簡単なジジ抜き！ さあ！ 始めるよ！」

魅音の合図でゲームがはじまった。

「……しかし、俺はこの時気づいていなかった。このメンバーがただ者でなく、部活も普通ではないことに……。」

部活開始！（後書き）

次回！果たして幸作の運命はいかに！

．．．．．みたいな次回予告をやってみたかっただけです

部活とトラップ(前書き)

なんだか更新が久しぶりです
とりあえずはじまり

部活とトランプ

テーブルの上にはトランプが並べられている。手札を選べることだろうが、結局はジジ抜き。大富豪やポーカームたいに手札がどうであれあまりゲームに支障はでないだろう。とりあえず手前のを……。

「幸ちゃん、甘いね」

「は？」

「いいか幸作。たかが手札と思うことなかれ。手札選びこそ、勝敗を分ける鍵となるのだああ！」

圭一、魅音、レナが真剣な顔つきで手札を選ぶ。その後を沙都子も続く。最後に手札を選んだのは……梨花だっけか？ 名前。

「残り物には福があるのですよ。にぱー」

俺の視線に気づいたのかこっちに笑顔を向けてくる。なんだか雰囲気的に只者じゃない気がするんだよな。梨花って名前もどこかで聞き覚えがある。

「幸作くん？ カード捨てないの？」

「えっ。あっ、忘れてた」

レナの言葉で思い出す。慌ててかぶっているカード選ぶと机にある山に重なる。

が、そこで一時停止。

「おい、みんな手札少くないか？」

「そりゃあこの数だしね。少なくともなるよ」
「いや、それにしてもすくなくすぎるだろ。特に魅音とか」

みんなの手元にある手札は指で数えられる程度。

一方、俺の手札はその倍。鈴香のなんかだいぶ少ないぞ。そういえば沙都子が鈴香がカード取るとき、なんか耳打ちしてやがったな。

「まさか、これちゃんと切ってないな？」

「やだな。切ったよ。一つをのぞいて」

魅音の顔がしてやったりと俺を見ている。ってことはあれか？一人は絶対に負けるようになっていてることか？ちくしょう。はめられたあああ！

「ちょっとまって！　こんなの反則じゃあー」

「幸作！　それは言いがかりだぜ？　お前がこのテストを受けると言った瞬間から、勝負は始まってるんだ」

圭一が口の端を上げて言う。

「つまり、この勝負をただのトランプゲームだと思っていた時点で、お前の負けは確定していたのだああああ！！」
「ぐわあああ」

なんだこの敗北感。畜生、悔しいぞ。

「大丈夫だよ幸作くん。次があるって」

どうやらレナに心配をかけていたようだ。

次？そんなものあるわけねえ。なぜなら、

「ここまでコケにされて黙ってられっか！ 見てる圭一」

「俺が勝利する予定だからだ。」

「おっ、いいねえその心意気。幸ちゃん、気に入ったよ」

「はっ、軽口叩けるのも今のうちだぜ？ 圭一と一緒にコテンパンに
してやる」

「さて、できるかなあ？」

魅音と圭一と睨みあう。

見てろ、魅音、圭一。

その自信満々な顔を、絶対に絶望に変えてみせるぜ！！

部活とトラップ（後書き）

さて、自分は心理描写が苦手でした

この部活の見所である騙し合いがまったくうまく書けていませんね

ww

今年ももう終わりですし、来年こそはしっかりと書けるようにしたい
ものです

ということ、アドバイス等あればお願いします

部活の罰ゲーム

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだよ。笑いたきゃ笑えばいいだろ」

学校からの帰り道。俺と鈴香はそんなことを話しながら帰っていた。

「圭一くんも幸作くんもかぁいいよぉ」

「幸作、似合っているのですよ」

「ここまで似合うと逆に面白味がありませんわ」

「がっはっは。こりゃぁ意外だったね」

レナたちは好き勝手話している。

気づいた人も多いと思うが、俺と圭一は絶賛罰ゲーム中だ。だが、これだけは言っておく。俺はビリではない。

「くそぉ、まさか幸作の作戦にまんまと引っかかるとは」

圭一は俺の横でブツブツと文句を言っている。

そつ。ビリは圭一だ。どうせ罰を受けるならと、俺が畏にはめた。あんなにあっさり引っかかってくれると返って清々しい。

「いやぁ。おじさん、とんでもない原石を見つけちゃったかもしれないよ」

魅音が俺と鈴香を見て言う。

「幸作は確かにすげえが、鈴香ちゃんは梨花ちゃんと沙都子が助言

してたんじゃないのか？」

「圭ちゃん、甘いよ甘い。梨花ちゃんと沙都子がそう簡単に助言なんてすると思う？」

圭一は魅音の言葉に首をかしげる。

沙都子や梨花は、自分たちのことが話されているとも思わず、鈴香と楽しげに話している。

「梨花ちゃんと沙都子は確かに助言はしていた。それもほんの少し。あとはだいたいウソをつけてたんだよ」

「なっ！」

圭一は驚く。

沙都子はあるかもしれないとは思っていたが、まさか梨花までとは。恐るべし、部活メンバー！

「しかし、鈴香ちゃんはそのウソをすべて見抜き、なおかつほんの少しの情報から攻略法を導き出したってわけ」

うむ、鈴香にそんな力があるとはまったく思わないが、物分かりは良かった気がする。サスペンスのドラマだって、一番最初に犯人わかってたし。

「でも幸作くんもすごいよ。あんな場面で圭一くんに勝つなんて」

「圭ちゃん、本気出さなかったんじゃないの？」

「それは心外だな。俺はいつも本気だぜ」

圭一の言葉に魅音がにやりと笑う。

「ということ、圭ちゃんの実力だったってことだね？」

「なっ!？」

「どうやら圭一は魅音の罠にはまっただらしい。」

俺はその様子を横目で見ながら、鈴香たちを見る。三人は本当に楽しそうだ。今日始めて会ったとは思えないくらいに。

「なるほど。そうか」

俺と鈴香がこうやって楽しく下校できるのも、魅音が部活に誘ってくれたおかげ。

少しくらいなら、魅音に感謝してもいいかもしれないな。女装なんてさせられているから、思いつきり感謝はできないがな。

「幸作! 明日の部活こそ、俺はお前に勝ってやるからな。覚悟しておけえ!」

「はいはい」

大声を張り上げる圭一を、軽く受け流す。

——こうして俺と鈴香の雛見沢分校一日目は終了した。

部活の罰ゲーム(後書き)

圭一ってわりと罰ゲームしますよね
もうそろそろ両親がなんの部活をやっているのか疑ってもいい時期
かとww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4636y/>

ひぐらしのなく頃に 転生編

2012年1月6日08時45分発行